

煙道付炉穴について

中 尾 真 琴

2021 8月

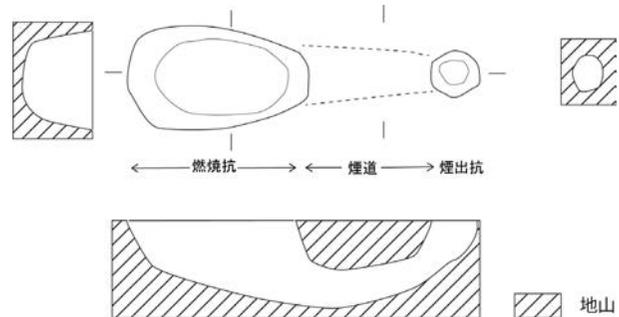
公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

煙道付炉穴について

中尾真琴

1. はじめに

煙道付炉穴とは、縄文時代早期に見られる遺構である。分布は南九州から東北にまで及び、集落内の平坦な場所に形成されている例が多い。風の利用は考慮されていないことである(山田2014)。これまでに、形態の分類や燃焼



第1図 煙道付炉穴(山田2014からトレース)

実験なども行われており、その性格についての議論がなされてきた。そうした中、遺構内に被熱の痕が見られるものが多いため、機能的にはおそらく火を用いていたのだろうといわれている。実際それを裏付けるように、よく炭化材の出土が報告されている。それらについては、これまでの研究で指摘されてはいるが(山田2014など)、どれも軽く触れているだけであり統計的な数量などはわからない。

では、実際に煙道付炉穴から出土する炭化材はどのようなものなのか。クリ以外のものは確認されているのか。縄文時代の遺跡からは、建築材や燃料としてクリが発見されることが多いようである(鈴木2016)。これは先行研究の「クリの出土が多い」との指摘とも合致する。具体的なデータでもクリの数値は主になってくるだろう。一方、同じように火を用いたとされる「炉」や「炉跡」と呼ばれる遺構からは、クリを主体としながらも数種類の樹種が確認できる(鈴木2016)。このことに関して、燃料の使用が想定される点は共通しているが、煙道付炉穴でもクリ以外の樹種が確認できるのであろうか。以下、煙道付炉穴の燃料について考えてみたい。

2. 煙道付炉穴とは

まず、煙道付炉穴について簡単に説明する。第1図が示すように、煙道付炉穴は燃焼坑、煙道、煙出坑にわけられる。燃焼坑に燃料を置き火を焚く。そして、その煙と熱が煙道を

付表1 地域間での時期と形態(安藤2010から作成)

地 域	時 期	形 態
九州	草創期～早期前葉	細長い
近畿・東海・中部	早期前半	二等辺三角形状
関東	早期後半	やや幅広、ずんぐりしている

通り、煙出坑から出ていくという仕組みである。さらに、報告書によっては煙道と燃焼坑の境目を「焚口」と呼んでいるものもある(田中ほか：2016)。呼称について統一が行われているわけではないため、人によって呼び方に多少の違いがある。中でも、今回は比較的イメージしやすいものを採用した(山田：2014)。分布は先にも触れたが、南は鹿児島県から北は青森県まで存在が確認されている(安藤：2010)。

地域間での違いは、時期と形態(付表1)、占地状況にみられる。時期は九州が草創期から早期前葉、近畿・東海・中部が早期前半、関東が早期後半である(安藤：2010)。そのため、伝わり方としては南から関東へ伝播していったとされている。

形態については、特に東海地方で二等辺三角形状を成すものが多いという(安藤2010)。ここでは便宜上三重県を東海地方に含めるが、その三重県ではこの形態に類似した遺構が他にも見つかっている。それが、有爾郷の土師器焼成坑である。古代から伊勢神宮への土器調進を行っていた地域で、その土師器焼成坑が二等辺三角形に近い形をとっている。そうした土師器焼成坑が多気郡明和町の北野遺跡などで多数見つかっている。時代を超えて似たような形態の遺構が一地域に重なっている現象は非常に興味深い。

煙道付炉穴の検出状況としては、近畿から東海地方西部では竪穴住居址に重複、もしくは近接した場所で発見される。対して、関東では斜面部に構築されているものが多い。

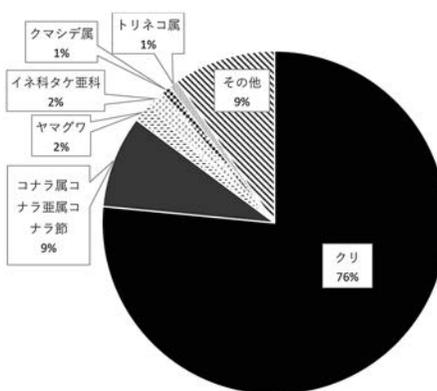
以上、煙道付炉穴について概観したが、九州、近畿・東海・中部、関東の3地域にまともを確認でき、それぞれに少しずつ違いがあることがわかる。

3. 炭化材

ここからは、実際に煙道付炉穴から見つかった炭化材をみていく。煙道付炉穴から見つかった炭化材の報告はよく見かけたが、実はそれらの樹種同定まで行っているところはそう多くはないとわかった。その結果、地域の偏りと試料数の少なさといった課題が残ってしまったが、樹種が報告されているものをまとめた。報告数としては三重県が一番多く、5遺跡で炭化材の樹種同定が行われている。それ以外の地域では、愛知県と岐阜県からの報告を確認した。今回は三重県を東海に含めた場合、東海地方に限った傾向ということになる。

全体の構成樹種としてはクリが大多数を占め、それ以外の樹種はわずかであるとわか

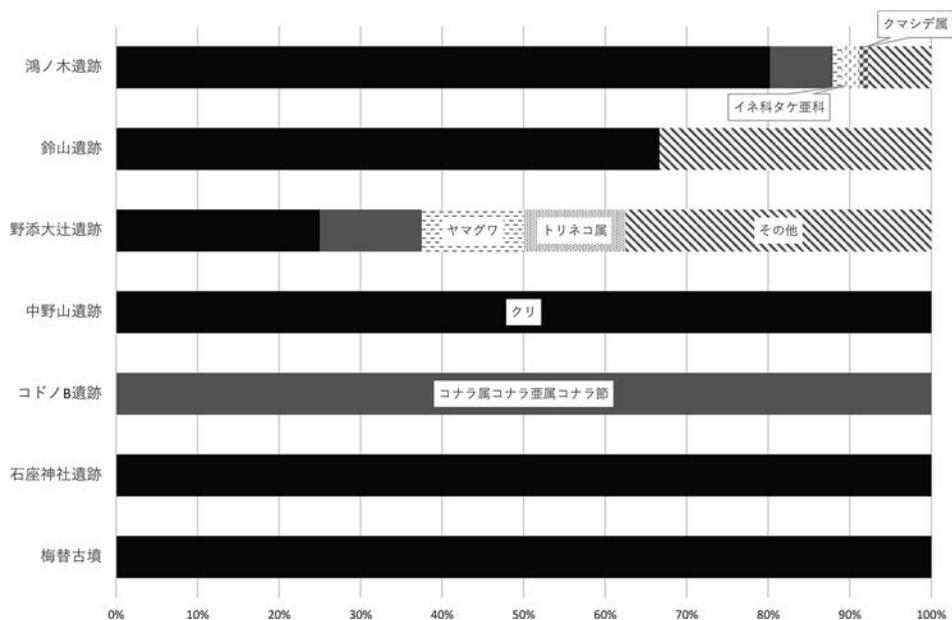
る。三重県の鴻ノ木遺跡や野添大辻遺跡では、コナラやヤマグワなどクリ以外の樹種も見つかっている。コドノB遺跡ではコナラのみ確認になるが、その他の遺跡では試料数の多い少ないに関わらずクリが一貫して確認できる。具体的には、全体で76%を占めている(第2図)。今回は、試料の量と樹種構成の多様性は比例する様子が見えなかった。結果として、煙道付炉穴からはクリをはじめ数種類の樹種が出土していると



第2図 炭化材構成比率

わかった。この結果は、先にたてた仮説を裏付けるものになったといえる。ただ、クリは他の樹種に比べ焼け残りやすいという(鈴木:2016)。そのため、他の木の確認ができなかったり、少なかったりするからといってクリが優先的に使われていたと一概にはいえないのであろう。これは、この後の検討でも配慮しておくべきと考える。それでも、煙道付炉穴ではクリを用いていたということは明らかにできた。

ところで、燃料には建築材の廃材や枝、端材を用いていた可能性があると言われている(鈴木2016)。実際、クリは頑丈な上に他の樹種に比べ伐りだしやすいことから、建築に



第3図 炭化材樹種構成

付表2 煙道付炉穴からの炭化材樹種一覧

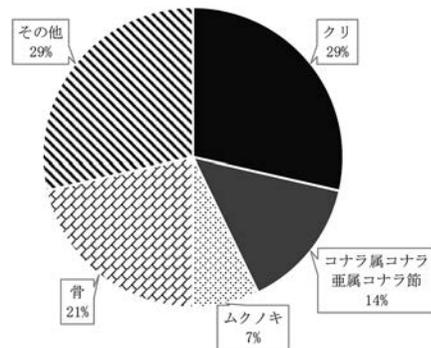
遺跡名	所在地	時期	試料数	検出遺構	炭化材の樹種							
					クリ	コ ラ コ ナ 亜 コ 節	ナ 属 ナ ラ 属 ナ ラ	ヤマ グ ワ	イ ネ タ ケ 科	ク マ シ デ 属	ト ネ 属	リ コ
三重県												
鴻ノ木遺跡	松阪市射和町字鴻ノ木ほか	早期	91	SF204	1							
				SF216		1						
				SF226	10							
				SF227	12		1		1		1	
				SF228	10							
				SF229	14						1	
				SF245							1	
				SF247	21	6		2			4	
				SF249	5							
鈴山遺跡	三重郡菟野町大字音羽	早期	3	SF60	1							
				SF91	1							
				SF97						1		
野添大辻遺跡	度会郡大紀町野添	早期	8	SF33			1					
				SF36							1	
				SF44							1	
				SF53							1	
				SF58						1		
				SF59		1						
				SF60	1							
				SF61	1							
中野山遺跡	四日市市北山町字中野山	早期	5	SF391	2							
				SF409	3							
コドノB遺跡	多気郡明和町上村字コドノ	早期	2	SF32		1						
				SF88		1						
愛知県												
石座神社遺跡	新城市大宮字狐塚	早期	5	3580SL	1							
				3590SL	2							
				5050SL	1							
				5060SL	1							
岐阜県												
梅替古墳	加茂郡坂祝町深萱字梅替	早期	1	SL2	1							
合計			115		88	10	2	2	1	1	11	

向いているという(鈴木:2016)。この可能性は、今回検討を行った遺跡でも当てはまってもおかしくはない。推測が正しければ、遺跡から検出された建物にはクリが主として用いられていた様子が確認できるはずである。したがって、次は住居に使われていたと思われる材を調べてみる。

4. 住居からの炭化材

先に取り上げている5遺跡の中で、煙道付炉穴と同時期の住居からの炭化材の出土があったものを調べた。結果、三重県の鴻ノ木遺跡のみの確認となった。

第4図の通り、数種類の材もしくは骨が見つかった。総資料数は14点である。煙道付炉穴からのものと共通している樹種はクリとコナラで、ムクノキは煙道付炉穴からは見つからない。住居跡からもクリやコナラの炭化材が見つかったことから、鴻ノ木遺跡ではこの二種類をよく用いていたといえよう。



第4図 炭化材構成比率

5. おわりに

ここまで、煙道付炉穴からの出土物として炭化材を取り上げ、この遺構で使われたであろう燃料材についてのデータをまとめてみた。調査を行った結果、煙道付炉穴からの炭化材の樹種同定を行っている遺跡は5遺跡に留まる。その中で、最も多く確認できたのはクリであり、これは住居からの炭化材の構成組成とも似る。この現象を見ると、一概には言えないが、煙道付炉穴の燃料材に住居の廃材を回していたと考えることもできよう。東海地方の煙道付炉穴はそれぞれが単独で存在するといったものではなく、廃絶後の住居の窪地を利用する場合や、その近くに作られていることが多い。住居との距離が近い分、燃料として廃材を使う機会は多かったのかもしれない。一方、クリは燃えにくいために残りやすいといった指摘もある(鈴木2016)。この点には、燃料に用いる際にわざわざ燃えにくい材料を選び出すのだろうかという疑問が浮かぶ。クリには様々な利点があったようだが、燃えにくいという点を考慮した場合、もしかしたらクリ以外の材料が主として使われていたかもしれないことは十分に考えられる。どうしても残存率に左右されてしまうため、そこは解明が難しいところである。そうした中、今回の検討では、縄文時代にクリがよく使われていたということは、煙道付炉穴にも当てはまると明らかにできたのではないだろう

か。なお、煙道付炉穴からのその他の出土物についてや最新の分布状況などまだまだまとめべき点は多く、今後の課題としたい。

(なかお・まこと = 当調査研究センター調査課調査員)

参考文献

- 安藤雅之 2010『縄文時代早期を中心とした煙道付炉穴の研究』弘報印刷株式会社 自費出版センター
鈴木三男 2016『クリの木と縄文人』同成社
岐阜県文化財保護センター 2015『梅替古墳』岐阜県文化財保護センター調査報告書 135
(公財)愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター 2015『石座神社遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 189
三重県埋蔵文化財センター 1998『鴻ノ木遺跡』三重県埋蔵文化財調査報告 123-4 下
三重県埋蔵文化財センター 2018『鈴山遺跡 (第2・3次) 発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告 323-11
三重県埋蔵文化財センター 2014『野添大辻遺跡 (第1次) 発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告 353
三重県埋蔵文化財センター 2016『中野山遺跡 (第2・3・6・7次) 発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告 186-8
三重県埋蔵文化財センター 2000『コドノB遺跡 (第2次・第3次) 発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告 214
山田猛 2014「煙道付炉穴について」『第10回東海縄文研究会 東海地方における縄文時代早期前葉の諸問題』東海縄文研究会